慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	メタファーと論証意味論
Sub Title	La métaphore et la sémantique argumentative
Author	喜田, 浩平(Kida, Kōhei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.2 (2020. 12) ,p.27 (154)- 37 (144)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小倉孝誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190002-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メタファーと論証意味論

喜田　浩平

伝統的にメタファー的意味は、言語表現の本来の意味とは異なる「何か」と定義される[1]。しかし様々なメタファーの事例を観察すると、そのような「何か」を特定するのが困難であり、しかも複数の表現の「何か」の一貫性や整合性がどのように保証されるのか不明であるような事象に出会うことがある。以下では、そのような事象を取り上げ、「論証意味論」と呼ばれる枠組みを用いて分析する[2]。この枠組みは「本来の意味」と「何か」の区別を前提とせずに意味の構築を体系化しようと試みるものである。

1. 問題設定

本稿の全体を通じて、以下の例を中心に議論を進めたい。バルザックの『毬打つ猫の店』からの引用である[3]。

> Le bandeau qui couvrait les yeux du jeune artiste fut si épais qu'il trouva ses futurs parents aimables. (Balzac, *La Maison du chat-qui-pelote*, I, p. 70)
> 若き芸術家の目を覆っていた目隠しが分厚くなったため、彼は未来の両親が愛想いいと思った。

画家テオドールは、相思相愛のオーギュスティーヌとの交際を許され、彼女の家に招かれる。シャンパーニュなどが振る舞われ、テオドールはオーギュスティーヌの家族と打ち解けたようである。

名詞bandeauは「帯状の布」、物質的「目隠し」（目の周りに巻き付けて視界を遮るための布）、比喩的「目隠し」（認識や判断を鈍らせるような非物質的な何か）などを意味する。ここでは第三の意味に理解するのが妥当であろう。そのような「目隠し」の原因は、テオドールが抱くオーギュスティーヌに対する愛情であろう。引用の前半部分は「恋愛感情による盲目状態」を示唆するものと解釈できる。

後半部分は、語り手による一種のユーモアあるいはアイロニーと捉えることができる。先行文脈では一貫して、オーギュスティーヌの両親は生真面目で堅実な商人として描かれ、娘が芸術家と結婚することに反対する様子が強調されている。彼らは最終的には結婚に同意するが、必ずしも将来の婿に対して「愛想いい」わけではない。この部分は、浮かれる芸術家が現実認識を誤ったと解釈するのが妥当であろう。

引用の前半を構成する主要な要素、すなわち名詞bandeau、動詞couvrir、名詞œil（複数形yeux）、形容詞épaisの意味について考えてみたい。当面のところ、伝統的な「本義」の概念を採用することとしよう。ある語の本義とは、具体的で物質的な意味、語源的に古い意味である。名詞bandeauの本義は「帯状の布」あるいはそれを用いた「目隠し」である。ここでは後者の意味に限定する。動詞couvrirの本義はある物が別の物を物理的に「覆う」、名詞œilの本義は生理学的な視覚器官としての「目」、形容詞épaisの本義は物体のある側面の幅が大きいこと、すなわち「厚い」である。

先述のように、引用文で名詞bandeauは本義ではなく非物質的「目隠し」を意味すると考えられる。このメタファーは定着した語義として辞書にも記載され、「情熱、先入観、無知などから生じる、一種の精神的盲目状態[4]」、「精神や心を盲目にする原因[5]」、などの説明が与えられる。しかしbandeauのみが比喩的で、他の語は本義で用いられると仮定すると、その整合性が問題になる。「精神的盲目状態」が「若き芸術家の目を覆う」とはどういうことだろうか。「精神や心を盲目にする原因」が「若き芸術家の目を覆う」とはどういうことだろうか。そのような「原因」は、具体的にはオーギュスティーヌに対する恋愛感情であろうが、「恋愛感情が目を覆う」とはどういうことだろうか。

整合性のある解釈を得るためには、他の語も比喩的に理解する必要がある。名詞œilはしばしば比喩的に用いられる（les yeux de l'esprit「精神の目」、les yeux

du cœur「心の目」)。動詞couvrirと形容詞épaisは比喩的に理解できるだろうか。その場合、具体的に何を意味し、名詞bandeauやœilとはどのような形で意味的に結合するのだろうか。そのような比喩的意味は、本義からどのように派生するのだろうか。

問題の本質は、各語が「本義」とは異なる何かを意味すると考えることの是非にある。そのような意味が存在しないということではない。それを特定するのが困難であり、整合性と一貫性のある形で解釈するのが困難なのである。では、「本義」と「比喩的意味」の区別を想定せずに解釈の整合性を説明することは可能だろうか。

2. 論証意味論

表現の意味を外界の事物との関係（指示的関係）に還元する立場に代替するものとして構想された「論証意味論la sémantique argumentative[6]」は、意味を表現と表現の「論証的関係」と見なす。「論証」とは、伝統的なレトリックでは根拠に基づく説得行為を指すが、論証意味論ではある種の発話の連続体を指す。以下では、論証意味論の最新のヴァージョン[7]から必要な道具立てのみを取り出し、簡略化して紹介する。

まず「論証的連鎖enchaînement argumentatif」から。これは、二つの節をdoncやparce queなどで接続したものである（il fait chaud donc Pierre est contentあるいはPierre est content, parce qu'il fait chaudなど)。pourantやbien queなどによって接続されたものも論証的連鎖である（il fait chaud pourtant Pierre n'est pas contentあるいはPierre n'est pas content, bien qu'il fasse chaudなど)。論証的連鎖は発話の意味を明示化するための手段である。

次に「論証的スキーマschéma argumentatif」について。これは複数の論証的連鎖を抽象化し一般化したものである。二つの論証的連鎖il fait beau donc Pierre est contentとJean était content parce qu'il faisait beauから取り出せるスキーマをBEAU TEMPS DC CONTENTのように表記する。doncやparce queなどの接続表現は一括してDCと表記され、pourantやbien queなどはPTと表記される。NEGは「論証的否定」を表し、統語的な否定表現ne ... pasのみならず、論証的に否定に方向づけられる表現（peuやmalなど）を表す。

論証的連鎖を抽象化したものがスキーマであり、スキーマを具体化したものが論証的連鎖である。PRUDENT DC NEG ACCIDENTはPierre est prudent donc il n'aura pas d'accidentあるいはJean n'a pas eu d'accident parce qu'il a été prudentなどによって具体化される。DANGER PT FAIREはc'était dangereux pourtant Pierre l'a faitあるいはJean le fait bien que ce soit dangereuxなどによって具体化される。スキーマを構成する要素がそのままの形で論証的連鎖で用いられるとは限らない。DANGER PT FAIREがil y avait du brouillard pourtant Pierre a conduit la voitureによって具体化される場合、brouillardがDANGERの一つの個別例と見なされ、conduire la voitureがFAIREの一つの具体化の形と見なされる。このような場合、スキーマと論証的連鎖の間に「ギャップdécalage」が生じると言われる。

最後に、「論証的役割rôle argumentatif」について。発話を形成する語は、論証的観点から「構成constituer」や「修飾modifier」などの役割を担う。「構成」とは、発話の意味構築の中心となるスキーマを提供する役割である。発話Pierre est prudentの意味が論証的連鎖Pierre est prudent donc il n'aura pas d'accidentによって明示化できる場合、形容詞prudentが「構成」の役割を担い、スキーマPRUDENT DC NEG ACCIDENTを提供する。「修飾」はスキーマに影響を与える役割である[8]。名詞changementが「構成」の役割を担い、スキーマCHANGEMENT DC DÉPAYSEMENTを提供すると仮定しよう。二つの発話le changement de Paris est *rapide*とle changement de Paris est *lent*を比較すると、形容詞rapideおよびlentは名詞changementを「修飾」する点で共通している。さらに、rapideの機能はchangementのスキーマを維持しつつ「強調」することである（le changement de Paris est rapide donc tu seras très dépaysé）。これに対し、lentは一種の否定として機能し、changementのスキーマを「反転」し、NEG CHANGEMENT DC NEG DÉPAYSEMENTに変換する（le changement de Paris est lent donc tu ne seras pas dépaysé）。このように、「修飾」は「強調」や「反転」などに下位区分される。

3. 仮説

『毬打つ猫の店』からの引用に戻ろう。この発話の意味構築を説明するために、前半部分の主要な構成要素の中からbandeau、œil（複数形yeux）、épaisのみに注目する。それぞれについて以下のような仮説を立て、一つずつ具体例に即し

て検証する。

(a) œil：「構成」の役割を担い、スキーマ ŒIL DC VOIR と ŒIL PT NEG VOIR を提供する
(b) bandeau：œil に対する「反転」の修飾語
(c) épais：bandeau に対する「強調」の修飾語

まず仮説 (a) から。名詞 œil と動詞 voir の密接な関連は明らかであろう。ただしここで問題になるのは、あくまでも二つの語 œil と voir の関係であり、両者を含む形で論証的連鎖が構築できるという点のみである。したがって、名詞 œil が指示的に何を意味するのか、本義か比喩的意味か、後者の場合それが具体的に何を意味するのか、という問題は全く関与しない。この点を踏まえて次の例を見てみよう（太字は本稿の筆者による、以下同様）。

À Paris, où les pavés ont des oreilles, où les portes ont une langue, où les barreaux des fenêtres ont des **yeux**, rien n'est plus dangereux que de causer devant les portes cochères. (Balzac, *Le Cousin Pons*, t. VII, p. 571)
パリでは、敷石に耳があり、戸口に舌があり、窓の格子には目があるため、建物の入り口の前でおしゃべりをすることほど危険なものはなかった。

『従兄ポンス』からの引用である。二人の人物が「建物の入り口の前でおしゃべりすること」、そして第三の人物がそれに聞き耳を立てることが物語の展開に大きな影響を与える。語り手がそのエピソードに関して、一般的な観点からコメントする箇所である。ここで「窓の格子には目がある」とはどういうことだろうか。「窓の格子」はメトニミー的に「窓の格子の後ろにいる人々」を意味すると解釈することもできるが、文字通り「窓の格子」と解釈しよう。その場合でさえも、窓の格子に動詞 voir を適用するのが自然な解釈ではないだろうか（窓の格子に「目」があるならば、それは何かを「見る」ことができる）。窓の格子の œil が本義なのか比喩的意味なのか、voir が本義なのか比喩的意味なのかは関係ない。œil と voir を中心とした連鎖の整合性のみが重要である。

仮説 (a) にはもう一つ重要な点がある。名詞 œil にはスキーマ ŒIL DC VOIR のみ

ならず、別のスキーマ ŒIL PT NEG VOIR も同等の可能性があるものとして想定する。それは以下のような例を説明するためである。

> Quand vous serez arrivé dans la sphère impériale où trônent les grandes intelligences, souvenez-vous des pauvres gens déshérités par le sort, [...] qui ont eu des **yeux** perçants et n'ont rien vu, [...]. (Balzac, *Illusions perdues*, V, p. 210)
> あなたが将来、偉大な知性が鎮座する帝国に辿り着くことになったら、運に恵まれなかった人々のことを思い出してください。[...]その人たちは、鋭い目があるのに何も見ていない[...]。

『幻滅』の第一部『二人の詩人』で、バルジュトン婦人がリュシアンを慰める場面である。接続詞 et には et pourtant とほぼ同義の用法があるが、引用の最後の部分はこれに該当し、スキーマ ŒIL PT NEG VOIR が具体的な形で表現されたものと分析できる。なお、ここでも動詞 voir が指示的に本義か比喩的意味かという問題が生じるが、論証的には重要ではない。

仮説 (b) に移ろう。これは例えば次のような例で検証できる。

> Nucingen, cet homme si profond, avait un **bandeau** sur les yeux ; il se laissa faire comme un enfant.
> (Balzac, *Splendeurs et misères des courtisanes*, VI, p. 576)
> ニュシンゲンという、あれほどまでに洞察力のある男が、目隠しをしていた。子供のようにされるがままになった。

『娼婦盛衰記』の第二部『恋は老人にどれほど高くつくか』で、エステルに入れあげるニュシンゲンはアジーの言いなりになる。「目隠し」をされたニュシンゲンが、「子供のようにされるがまま」であったのは、周りが「見えない」からであろう。名詞 œil に想定される二つのスキーマ ŒIL DC VOIR と ŒIL PT NEG VOIR のうち、文脈的要因（おそらく profond「事物の本質に深く入り込む」の影響）により、前者のみが選ばれる。名詞 œil に対し bandeau は修飾表現として機能し[9]、スキーマを「反転」させ、新たなスキーマ NEG ŒIL DC NEG VOIR を生み出す。当該箇所の意味はこれに基づいて構築される。「目隠しされた目」は論証的には「目

を持たない」に等しく、そのため「見えない」のである。ここでも、関与する要素œil、voir、bandeauなどが指示的に本義であるか比喩的意味であるかは重要ではない。

最後に、仮説(c)を検証する。『カディニャン公妃の秘密』からの引用である。

> Enfin, Diane s'impatienta contre cet Épictète amoureux, et, quand elle crut l'avoir disposé à la plus entière crédulité, elle se mit en devoir de lui appliquer sur les yeux le bandeau le plus **épais**.
>
> (Balzac, *Les Secrets de la princesse de Cadignan*, VI, p. 985)
>
> ついにディアーヌは、恋にのぼせるエピクテトスに我慢できなくなった。この男になら何でも信じ込ませられると確信した時、限りなく分厚い目隠しをしてやることに決めた。

公妃に強い関心を抱くダルテスに対し、公妃自身も強く惹かれるようになる。しかしダルテスは恋愛の駆け引きに不慣れで、公妃は苛立ち、一計を案じることにした。引用の最後の部分は解釈上の興味深い問題を提起する。「目隠し」は本義なのか比喩的意味なのか。後者の場合、具体的に何を意味するのか。後続テクストを読んで立ち戻れば、これがおそらく公妃が「秘密」を打ち明けることでダルテスを意のままに操ることを暗示するものと後付け的に理解できる。しかし物語の流れに沿って引用箇所に差し掛かった読者は、この時点ではまだ何もわからない。そのような状況でも読者は、ダルテスが現実を「見ない」と予想することは可能である。上記仮説を組み合わせると、名詞œilのスキーマŒIL DC VOIRが文脈的要因（おそらくse mettre en devoir de「備える、準備する」の含意する意図性）により選ばれ、これがbandeauによる修飾によって反転されると説明できる。形容詞épaisの働きはこれを修飾し強調することであると仮定すれば、解釈の整合性が維持できる。

4. 参照例の分析

仮説(a)(b)(c)を組み合わせることで、『毬打つ猫の店』からの引用が適切に分析できる。ただしその前にさらに二点ほど確認しておく事項がある。

まず、この例の全体は前半を論証的に展開したものであると仮定する。単文の発話の意味を明示するために、論証的連鎖が用いられることは珍しいことではない。発話Pierre a travaillé の意味が論証的連鎖Pierre a travaillé donc il a réussi à l'examen で明示化できるような状況で、論証的連鎖そのものを発話することは何ら不自然なことではない。単独の発話Pierre a travaillé のみでは多様な解釈が可能であるが、その範囲を狭めるためには連鎖の形で発話するのが最も確実な手段の一つである。

また、当該例はsi ... que という表現を含むが、これは「siを含む節の可能なスキーマの中から、DCタイプを選ぶ」と仮定する。例えば、名詞changement には少なくも二つのスキーマCHANGEMENT DC DÉPAYSEMENT とCHANGEMENT PT NEG DÉPAYSEMENT が想定できるが、le changement de Paris est si rapide que ... と言う場合、DCタイプのスキーマのみが選ばれ、PTタイプは排除される。これはおそらく、si ... que にdonc やpar conséquent で表現されるような「結果」や「帰結」のニュアンスが含まれるためと推測される。

『毬打つ猫の店』の例の分析に移ろう。その意味の構築は、次のように記述できる。まず、名詞œil がスキーマŒIL DC VOIR とŒIL PT NEG VOIR を提供する。si ... que の使用により、前者のみが選択される。これをbandeau が反転させ、NEG ŒIL DC NEG VOIR に変換する。épais はこのスキーマを強調する。その結果、当該例の前半はNEG ŒIL の具体化、後半はNEG VOIR の具体化と説明できる。前半は問題ないであろう。後半のVOIR はギャップとともに動詞trouver によって具体化され、NEG の部分はses futurs parents をaimables と見なすことが「間違いである」という解釈に対応する。

仮説(a)(b)(c)の妥当性をさらに高めるために、その組み合わせによって説明できる例をもう一つ追加しておこう。『偽りの愛人』からの引用である。

> Quelque **épais** que soit le **bandeau** qu'il a sur les **yeux**, il se sera sans doute aperçu de quelque chose, dit Adam. Malaga lui aura fait des traits.
>
> (Balzac, *La Fausse Maîtresse*, II, p. 229)
>
> 「目に被せた目隠しがどんなに厚くても、あの男はおそらく何かに気づくことになるだろう」、とアダンは言った。「マラガは浮気をしてしまうだろうし。」

マラガとタデは破局を迎えるが、マラガはタデに手紙を送って金の無心をする。タデはその手紙をアダンに預ける。アダンは手紙を妻に見せ、タデの不幸を嘆く。この例でも名詞bandeauは比喩的であり、「恋愛感情による盲目状態」を示唆するものではあるが、その点は重要ではない。本義か比喩的意味かという区別を超えたところで成立する整合性のみに注目する。

ここでもあらかじめ確認しておく事項がある。譲歩的なquelque ... queという表現は、複数のスキーマからPTタイプを選び出す。名詞changementに少なくとも二つのスキーマCHANGEMENT DC DÉPAYSEMENTとCHANGEMENT PT NEG DÉPAYSEMENTが想定できる場合、Quelque rapide que soit le changement de Paris, ...では後者のみが関与する。この表現が、「le changement de Paris est rapideにおいて、rapideにさまざまな段階を想定し、そのいずれにもかかわらず...」という意味の動きを含意し、「それにもかかわらず」の部分がpourtantで表現されるニュアンスを含むからであろう。

引用文は次のように分析できる。まず、名詞œilがスキーマŒIL DC VOIRとŒIL PT NEG VOIRを提供する。quelque ... queの使用により、後者のみが選択される。これをbandeauが反転させ、NEG ŒIL PT VOIRに変換する。épaisはこのスキーマを強調する。後半のVOIRは、ギャップとともに動詞s'apercevoirによって具体化される。

＊　＊　＊

「本義」と「比喩的意味」の区別は、「指示」のレベルで発生する。「論証」のレベルは、これよりも根源的である。そこでは、メタファー表現に本義とは異なる「何か」を想定する必要はない。発話を構成する要素が論証的に様々な役割を担うことにより、解釈の整合性が保持される。

註

1 ここで「伝統的」と呼ぶ立場は、Dumarsais (1730/1988) などはもちろんのこと、現代的な意味論や語用論の諸研究、例えばGrice (1989) やRecanati (2004) なども含む。グライスはメタファーを言外の「含みimplicature」として説明する。レカナティはメタファー的意味を語用論的に調整された語彙的意味と見なし、発話の真理条件的内容の一部を構成すると考える。このような違いがあるものの、いずれもメタファー的意味を表現の本来の意味とは別の「何か」と想定している点で共通している。

2 論証意味論の枠組みでメタファーを論じた研究には、Schulz (2004)、Kida (2017) などがあるが、いずれも基本的に一単語レベルのメタファーを対象としている。本稿では複数の語のメタファー的解釈の整合性に注目する。

3 バルザックの引用はすべて次の版による。Balzac, *La Comédie humaine*, Pierre-Georges Castex (dr.), Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I-XII, 1976-1981. 引用の末尾に巻とページを記した。

4 « L'espèce d'aveuglement moral qui naît d'une passion, d'une prévention, ou d'ignorance », *Dictionnaire de l'Académie française*, sixième édition, t. I, 1835, p. 157.

5 « Cause d'aveuglement de l'esprit ou du cœur », *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle*, Larousse, t. II, 1867, p. 150.

6 Anscombre & Ducrot (1983) から続く一連のアプローチを指す。Carel (2011) で大きな転換点を迎え現在に至る。以下のサイトで、関連する研究者や論文の情報が入手できる。https://semanticar.hypotheses.org/

7 Carel (2017)(2019)、Kida (2019a)(2019b) 参照。これらの研究で共有されているアイデアを要約した。例文はこの枠組みにおける様々な研究で頻繁に用いられるものをアレンジしたため、個別的な出典は明記しなかった。

8 論証意味論における「修飾」の問題は、Ducrot (1995) が決定的に重要である。ただしこの論文は最新バージョンとは異なる用語や概念を用いているので注意が必要である。本稿の「修飾」に関する記述は、この論文から例文を借用し、若干アレンジを加えた。

9 名詞bandeauが名詞œilに対して論証的な修飾表現として機能する場合、両者を統語的に結合する表現の考察が不可欠であるが、ここでは割愛する。『毬打つ猫の店』の例では動詞couvrirが用いられ、『娼婦盛衰記』の例ではavoirが用いられている。その他、動詞porterやappliquer（後続の『カディニャン公妃の秘密』の例を参照）の可能性もある。一方、動詞ôterやenlever、arracherなどを用いると、修飾関係が逆方向に向かうであろう。

参考文献

Anscombre, Jean-Claude & Oswald Ducrot. (1983) *L'Argumentation dans la langue*. Bruxelles, Mardaga.

Carel, Marion. (2011) *L'Entrelacement argumentatif*. Paris, Honoré Champion.

Carel, Marion. (2017) « Signification et argumentation ». *Signo*, UNISC, vol. 42, n° 73, p. 2-20.

Carel, Marion. (2019) « Interprétation et décodage argumentatifs ». *Signo*, UNISC, vol. 44, n° 80, p. 2-14.

Ducrot, Oswald. (1995) « Les modificateurs déréalisants ». *Journal of Pragmatics*, 24, p. 145-165.

Dumarsais, César Chesneau. (1730/1988) *Des tropes ou des différents sens*. Françoise Douay-Soublin (éd.), Paris, Flammarion.

Grice, Paul. (1989) *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA, Harvard University Press.

Kida, Kohei. (2017) « L'argumentativité de la métaphore dans une sémantique argumentative ». Marc Bonhomme, Anne-Marie Paillet et Philippe Wahl (éds.), *Métaphore et argumentation*, Louvain-la-Neuve, Éditions Academia, p. 117-134.

Kida, Kohei. (2019a) « De l'interprétation argumentative ». *Corela*, 17-2.

Kida, Kohei. (2019b) « L'argumentation et les descriptions définies ». *Discours*, 25.

Recanati, François. (2004) *Literal Meaning*. Cambridge, Cambridge University Press.

Schulz, Patricia. (2004) *Description critique du concept traditionnel de « métaphore »*. Berne, Peter Lang.